



2022年8月号
2022. 8. 31
第54号
発行：わらびじゆく
笑楽日塾



・ 荒井塾長あいさつ

戦争の犠牲と平和の配当（元社員の感慨）

笑楽日塾だより8月号 塾長挨拶



8月はいろいろな事が思い出される月でした。広島、長崎の原爆記念日、15日の終戦の日、そしてご先祖をお迎えするお盆など日本人として、家族として反省することが多い日々でした。戦後77年の前半はものすごいスピードで経済成長を達成した。その象徴の出発点が東海道新幹線の開業ではないだろうか。その後半は成長が止まり、失われた20年とか30年とかかつて輝いた時代を知る者としては「何やってんだろう」という気持ちもあるが、それでも77年間戦争をしないできたのは日本人の誇りではないだろうか。

しかし、この間に中国が、かつてニッポンから多額の円借款で救われたことはすっかり忘れて、アジア全域が俺のもんだと威張り散らし、実力行使に出る構えである。これに対して何も出来ないニッポンは軍備だけでなく外交交渉力も貧弱である。見ていて歯がゆいが、戦争をしないことが大きな富と平和の日常を生んでいるのだから、我慢したい。

先の大戦において多くの犠牲者がでた。蕨は埼玉県で熊谷について2番目に大きな空襲の被害を受けた。爆弾と焼夷弾の被害を免れたのが蕨に隣接する「日本車両・蕨工場」である。この工場が敗戦から17年経った昭和37年4月に世界最初の新幹線電車が完成した。蕨工場は昭和46年に閉鎖され、愛知県豊川市に移転した。そこは何処だったか。



蕨工場
昭和46年4月

今年、2022年8月17日の日経新聞に「東洋一の海軍工廠・今は公園に」と題して次のような記事があった。

【豊川市は2018年「東洋一の兵器工場」と呼ばれた豊川海軍工廠が1945年8月に受けた空襲で亡くなった学徒ら2724人の名簿を作った。多いときで約6000人の学徒が弾薬や双眼鏡といった軍事関連製品を製造。学徒同様に動員された「女子挺身隊」の多くも命を失った。市は工廠の跡地に平和公園を整備するのを機に名簿の作成に着手。空襲直後の工廠が作成した記録や死亡診断書などを詳しく調べて2724人の氏名を特定した】。



日本車両は【昭和38年7月、日本国有鉄道豊川工場4万4589坪と隣接の国有地（旧海軍工廠跡地3万4033坪の払い下げを申請し、昭和39年4月に売買契約を締結。合計9万3250坪・建物1万1519坪の引き渡しを受けた】。この払い下げのあと、豊川工場が建設された。その敷地の一部が海軍工廠の跡地だったことが分かる。

蕨工場は昭和47年に豊川への移転を完了し、「豊川蕨工場」となった。蕨工場で作られた0系新幹線電車の技術が豊川へ引き継がれて100系、200系、300系～700系など多くの新幹線電車が製造され今日に至っている。2019年8月2日に豊川で、新幹線電車製造4,000両という大記録が打ち立てられた。新幹線電車は2007年に台湾へ360両輸出された。

学徒や女子挺身隊の若い命が散った海軍工廠の跡地から新幹線電車が製造され巣立っていったのである。



台湾新幹線電車 2007年

国の命令に背くことも出来ず、多くの若い命が失われた。第2次世界大戦は世界の誰もが経験した戦争で、今を生きる若者にもつながっている歴史である。これからも平和について考えていきたい。戦争をしない平和の配当は計り知れない。

私の記憶は蕨工場と新幹線電車がいつまでもつながっている。



「報告事項」

1. 笑楽日塾8月 Zoomオンライン塾会報告

①、先崎 隆さんの「津軽の旅」「行田の蓮」報告



「津軽の旅」

数年前、司馬遼太郎の「街道を行く」の41巻「北のまほろば」を読んだ。これは、青森の旅である。なぜ“まほろば”という題名をつけたのか？少し長くなるが司馬遼太郎の巻頭を引用する。

「“まほろば”が古語であることは、いうまでもない。日本に稲作農業がほぼひろがったかと思われる古代——大和（奈良県）を故郷にしていた人——伝説の日本武尊——が、異郷にあって望郷の思いをこめて、大和のことをそう呼んだ。」そう記した後、司馬遼太郎は日本武尊が死に臨んでうたった歌が **倭（やまと）は 国のまほろば たたなづく 青垣 山隠（ごも）れる 倭しうるわし** である。

“まほろば”とは豊かでまろやかな国と言うことのような。縄文時代青森は豊かな魚介類や木の実、中・小動物が獲れた。また、共同体としても助け合いがあり、現代の社会でも学ぶべきことが沢山あるようだ。

私はこの本を読んで、縄文時代の青森に一度行ってみたいとなった。そんな時「大人の休日倶楽部」の生涯学習で「あおもりの縄文を知る講座」に参加した。とても参考になる興味深い講座であった。

大人の休日倶楽部ではその1ヶ月後に一泊の三内丸山遺跡見学の旅が計画されたが、予定が入っていたので私は参加出来なかった。今年の6月30日～7月3日に念願の津軽の旅ができることになった。

「行田の古代蓮の里」



友人といっしょに秋の季節、行田の街歩きをしたことがあった。観光協会でレンタサイクルを借り、忍城祉やさきたま古墳群を観光した。さきたま古墳群は東日本最多の古墳群である。

比較的大きい古墳が10基、小さいものが無数あり、副葬品も多数みついている。この時はあまり時間がなかったので、またじっくりと時間をかけて、見学に友人とくことにした。観光協会に戻ると、職員の方に「古代蓮の里」について話を聞いた。

蓮の花の開花時期と田んぼアートの時期が重なるようなので、古墳も含めて7月に観光することにした。この日はとても暑かったので、結局古墳の見学は諦めた。機会があれば笑楽日塾の塾生の人たちとも行ってみたい。

完

② 吉田 喜義さん報告

広報 WARABI2019 年 6 月号 ↓



輝いています

国際協力コンサルタント

ひと

吉田 喜義 さん

希望の未来へ架かる橋を

開 発途上国に対する支援
や技術協力などを行う
JICA（独立行政法人国際
協力機構）総合建設会社を定
年退職後、そのJICAの委
託で主に東南アジアの土木工
事の現地調査・施工監理業務
を行っているのが吉田喜義さ
ん（60歳・中央工員）です。
ときには一年半以上も現地に
駐在しながら快適で安全な暮
らしの実現に尽力しています。
恵田兵で北海道の北見に入
植した家に生まれた吉田さん、
小学生の頃、大自然の中を細
々と走る国道39号線が改良工
事され、みるみるりつぽにな
る様子が感動し、その作業を行
う土木従事者に憧れるようにな
りました。就職後は、国内外

の橋や道路などの土木工事に
従事。50代半ばでプロジェクト
責任者として携ったベトナム
のバイチャイ橋の建設では、
中央経開（橋脚間の距離が4
35mと当時世界最長の橋を
完成させることができました）
退職後も、「未発達なインフラ
が整備されていく感動をよ
り多くの人に」との思いから、
1年の充電期間を経て現業に
復帰した吉田さん。約15年間の
海外での経験を生かし、政
府開発援助による工事の監理
者を務めています。工事にお
いては「ものづくりは人づく
り」と、日本式の安全対策やメ
ンテナンスができるよう人材
教育を重視「手がけてきた橋
や道路が時を経てもしっかり
管理され、現地の皆さんに活
用されている様子を見て回る
のが夢です」と、目を細めます。
現在も1週間の日程でカン
ボジアに飛ぶなど多忙な毎日
です。そうしなか、中央小
の学校士職や放課後子ども
教室にも参加し、これまでの
体験を基にフロンティア精神
を持ち、挑戦することのたい
せつさを伝えている吉田さん。
人生の第二ステージでは、子
どもたちを夢や目標へとつな
ぐ心の橋も建設しています。

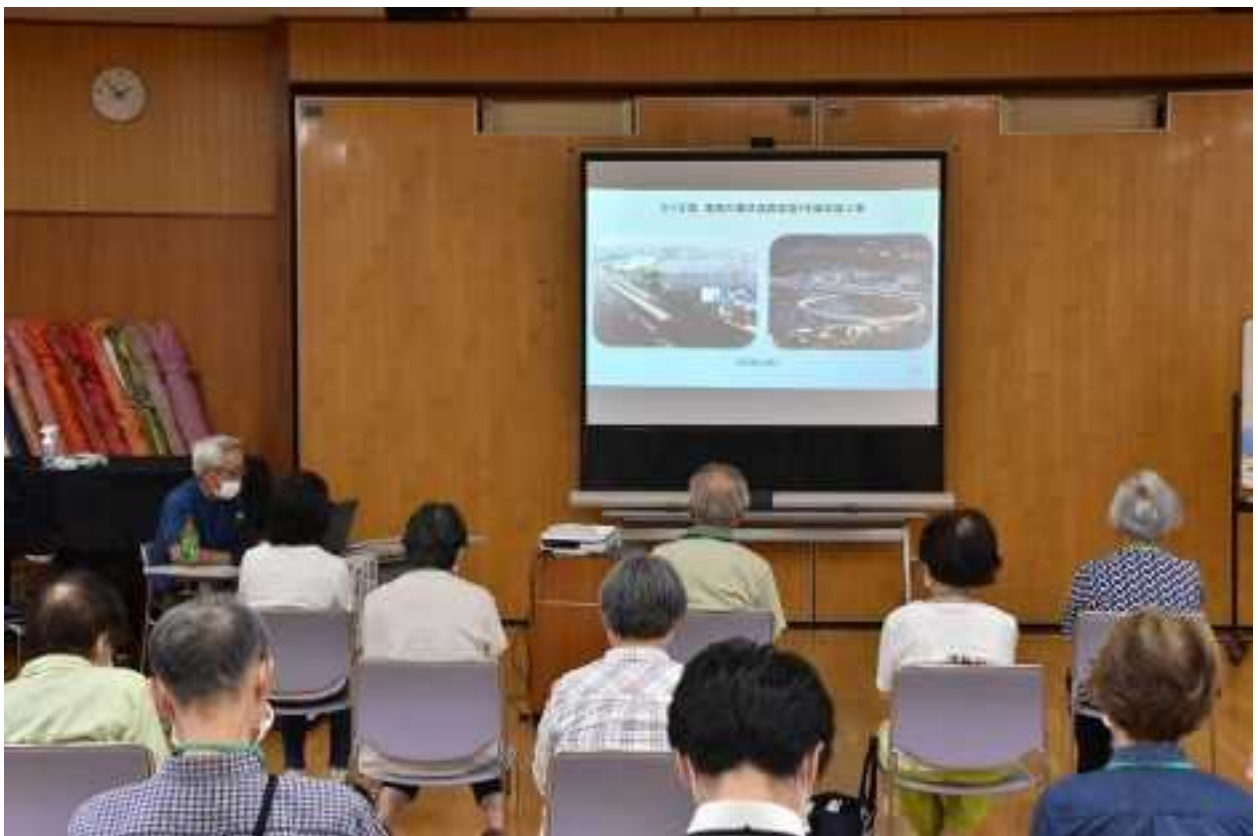
笑楽日塾の事件簿（塾生 星 広行 塾生ブログ 2022年6月号より）

<https://warabijyuku.hatenablog.com/entry/2022/06/22/060000>

《広報誌を見た塾生の感想》 笑楽日塾の事件簿より抜粋。

海外で活躍されている日本人をテレビで拝見することもかなり頻度であります、その多くの方はJICA（ジャイカ）から派遣されているとか。担当される仕事の内容は人それぞれだと思ふものの、世界で活躍されている吉田さんが笑楽日塾におられることに誇りに感じています。これからの塾活動の励みになります。

吉田さんが、下蕨公民館高齢者学級「下蕨学園」の公開講座で8月5日に「アジアの人々の安全で豊かな暮らしの実現に向けて」と題し講演され、聴講された皆様にも大変好評でした。



以上



「シニアの風」

(順番制で行います。9月「シニアの風」投稿は 荒川 徳広塾生です)

「相撲日和」

吉田 喜義

大相撲TV中継は、欠かさず見ている。今は特別ひいきの力士はいないが、ついつい時間になるとTVの前に座っている。

小学生の1, 2年生の頃は私自身身長も高く、体重も十分。親戚の叔父、叔母たちからは、「きよしちゃんは、大きくなったら相撲取りになればいいよ。」などと言われ本人もまんざらでなく「相撲取りも良いな。」と思っていた、

学校の休み時間では、よく仲間と相撲を取っていた。私の得意技は、「うっちゃり」押し込まれて土俵際の逆転技「うっちゃり」ではなく、土俵中央でがっちり右下手、左上手を取るとズズーと土俵際まで後ずさりしながら呼び込んでおいて土俵際まで来ると左から大きく吊り気味に上手投げ、「うっちゃり」である。

まわしを締めての相撲ではなく、ズボンを穿いて行う相撲である。まわし代わりにベルトを持って投げに行くとズボンのベルト通しが切れてしまい、ベルトのみを持つのは禁止で、ズボンとベルトを一緒につかむようルールができた。

大相撲界で小さいとき好きだった力士は。「北の洋」(きたのなだ)である。

北の洋は、栃若時代の名わき役で、小結、関脇で活躍した。前まわしを取るとすかさず前に出る速攻相撲、四つに組んでからしぶとく、土俵際のうっちゃり。三賞10個、金星10個あげた名力士で「白い稲妻」と呼ばれた。

私はどうも横綱、大関に在位している力士よりまさしく場所を盛り上げる三役格の力士を応援してきた。北の洋は、出身地も北海道網走市と郷土も近く親近感があった。TV中継を見るようになって、あの仕切りの美しさも大好きであった。



制限時間いっぱいになった仕切りで、そんきよの後 立会い前、右足を一步出した後、左足を土俵上にすり足で中央から左へすーっと爽快に送り立ち会う。きれいに腰が割れ毎回みごとな立会いであった。39歳まで現役を続け、大相撲協会でも親方として角界で貢献した後1998年に境界を定年退職した。そののち。「緒方 昇」としてNHK相撲中継の解説をやっていた。

本名で解説を担当したのは、「きたのなだ」の発音がアナウンサー連に難しく、本名での登場となったとのこと。優しい語り口は、まことに耳障り良く解説に聞き入っていた。

現在の解説者では、断然北の富士が面白い。特に初日と千秋楽の舞の海との掛け合いは視聴者を楽しませる。北の富士も齢80を超えてイマイチアナウンサーへの反応が遅かったり、声にも張りがなくしわがれ声が目立つ。本人が書くスポーツ紙のコラムも元気がなく弱音を吐くことが多いような気がする。

北の富士のご推薦若手は、「北の若」とか。今、十両で八角部屋所属、北の富士の孫弟子にあたる。しこ名の「北の若」も大師匠「北の富士」から名付けたとか？出身は山形県で北海道ではないが、今後は「北の若」を応援し、日本人横綱の誕生を夢見ることでしょう。



以上



八木 守

暑中お見舞い画



「笑楽日塾だより」第1号は2018年1月31日発行されました。同年1月17日(土)旭町公民館小会議室で笑楽日塾設立会が開催され、今回で54号となりました。

マハートマ・ガンディーの言葉ではありませんが、「よきことはカタツムリのようにゆっくり進む。人のためにはたらく者は、いたずらに急がない。よきことを受け入れるには、時間が要ることを知っているから。」

どんなに素晴らしい計画や理想があろうと一時の熱狂や勢いで変わったことは定着せず、おなじような速度でひっくり返されてしまう。

これからも、かたつむりの歩みで「笑楽日塾だより」を荒井塾長の下、塾生の皆様と一緒にコツコツと続けていきたいと考えていますので皆様、宜しくお願い致します。

完